

内閣官房 新型コロナウイルス等感染症対策推進室

## 尾形 はづき

## 統計の先に

## 数字を通して社会の変化を知る

私が総務省に入省してから2年8か月の間、その職業生活は常に新型コロナウイルス感染症とともにありました。1年目は労働力人口統計室に配属され、就業者数、完全失業率や休業者数等を調査している労働力調査の審査・発表業務に従事していました。当時は毎月の調査結果を分析する中で、新型コロナウイルス感染症が日本の労働市場に与えている影響の大きさを実感するとともに、その変化をリアルタイムで知ることができる場所に仕事の面白さを感じていました。



## 「コロナ対策」の最前線で

入省して3年目の現在、私は内閣官房新型コロナウイルス等感染症対策推進室に出向しています。こちらでは、新型コロナウイルス感染症に関する情報の収集・分析業務に携わっています。具体的には、新型コロナウイルス感染症の感染防止対策と経済活動の両立を図るために、企業やアカデミアと連携してAIを活用した分析やシミュレーションを実施しているほか、感染防止対策に資する新技術の開発についての検討や下水サーベイランス技術の実証事業等を行っています。

また、国で所有しているデータ以外にも、民間企業が所有しているデータや実証事業を通して得られたデータ等を分析し、時にはその活用方法について有識者の方々とともに検討しています。その中で、今まで知りえなかった知識や分析の切り口を得ることができ、非常に刺激的な毎日を送っています。

## 統計の先に

統計調査の結果その他各種データは素材であって完成品ではないと個人的には考えています。使われて初めて、その価値が生まれるものだと思います。統計調査において、継続性の観点から慎重にデータを積み重ねていくことは重要なことです。しかし、ただデータを積み重ねるだけで、ほこりをかぶせてしまっているのは非常にもったいないものです。

統計行政の使命は、単に統計を作成するだけにとどまらず、統計を作るところから使われるところまでの一連のプロセスをフォローすることだと私は考えています。行政全体で言えば、正確に現状を知るための統計調査を企画・実施し、その結果をもとに政策立案がなされ、よりよい社会を実現していくことが究極的に目指すべきところです。私自身、その一端を担う身として、日々大局的な視点でものごとを見ることを心掛けています。



## ひろがる「理工系」

実のところ、私の専門は教育社会学であり、統計学的素養を多少持ち合わせているものの、いわゆる「理工系」と言われるとそんなことはありません。入省する前の説明会で「数字に『アレルギー』さえなければ誰でもウェルカムです」という話を聞き、なんとかやっていけるかなと思い入省しました。「理工系」という名を冠しているものの、そこに包含される人材は非常に多種多様なのではないかと思います。ぜひ様々なフィールドからお越しいただければと思います。